



PICTURE BOOK AUTHOR
**TOMONORI
TANIGUCHI**

1978年生まれ。金沢美術工芸大学日本画専攻卒業。2004年『サルくんとお月さま』で絵本作家としてデビュー後、フランスで『CACHE CACHE』を始め数々の絵本を出版。その後イタリア、台湾、中国、カンボジアなどでも多くの作品を発表する。絵本以外にも、広告や商業施設の空間プロデュースなど多方面で活躍中。ライブペインティングやサイン会などのイベントも積極的に行なう。主な絵本に『100にんのサンタクロース』『サルくんとバナナのゆうえんち』など。『くいしんぼうのクジラ』で第9回、『カメレオンのかきごおりや』で第12回ようちえん絵本大賞受賞。大阪府四條畷市にてギャラリーカフェ『zoologique (ズーロジック)』を運営している。



絵本作家

谷 口 智 則
TOMONORI TANIGUCHI

紙の温もりにストーリーを乗せて、 一人ひとりの心に残る「特別な一冊」を。

原点は大学時代に出会った『鳥獣戯画』

編 谷口さんが絵本作家を志されたきっかけについて、教えていただけますか？

谷口 美大を目指していた浪人生のときに、イギリスの絵本作家展を見たのがきっかけです。子どもの頃から絵を描くのが好きだったのですが、一枚の絵で人に感動を与えるのって難しいなと思っていました。でも、海外の絵本作家さんの展覧会を見て、「絵だけじゃなくて、そこにストーリーがある『絵本』であれば、世界中の人たちに自分の想いを伝えられる」と思ったんです。それまで絵本って、子どものものだと思っていたんですが、海外の絵本を見て、これは大人でも感動できる作品だと思いました。これなら、大人から子どもまで幅広い世代に伝えられる。自分も作品を世界中の人たちに届けたいと思ったのが、絵本作家を志したきっかけでした。

編 そして、金沢美術工芸大学に入学されて、日本画を専攻されたんですね。

谷口 はい、展覧会を見たときに、自分も海外で活躍できるような作家になりたいと思ったんです。そのためには日本人として、日本の伝統の絵画とか、日本ならではの技法などをしっかり学んでから、自分の絵本に活かしたいと思って日本画を専攻しました。

編 実際に、大学で日本画を学ばれたことは、現在の谷口さんの作風に活かされていますか？

谷口 そうですね。影響を受けていると思います。大学2年生のときに『鳥獣戯画』を模写する授業があって、模写しているうちに、自分が描きたい絵本の世界に近いなと思ったんです。動物たちが二足歩行で擬人化されている世界観。そこから、いまの作品にあるような動物のキャラクターなどを描くようになりました。『鳥獣戯画』は絵巻物

で、文字がないんですが、絵を見ていだけでストーリーが浮かんでくるんです。自分がつくりたいのはこういう作品かなと感じた記憶があります。

編 いまのような画風は、その頃から培われたものなのでしょうか。

谷口 僕は黒い紙にアクリル絵の具で描いていくのですが、これは日本画の模写からヒントを得ています。絵巻物は古いものなので背景が傷んでいるところもあるわけですが、そういう部分まで全部模写していたんです。昔の白黒映画って、ちょっと傷が入ったように見えるじゃないですか。そういう雰囲気はどうしても再現したくて、黒い紙に書いてみたら、その“かすれ感”が出たんです。これだ、と思って、それから20年以上、ずっと黒い紙の上に書いています。

編 最初に谷口さんの作品を拝見したときに、この深みのある絵はどうやって生まれるのだらうと思ったのですが、そこにヒントがあったんですね。

谷口 黒が前に出ているのではなく、黒が向こう側にあるので、見ていて吸い込まれるような感覚というか、その物語の中に入っていける感じが出るのかなと思っています。

“文字のない絵本”が フランスの出版社の目に留まり…

編 大学卒業後、どのようにして絵本作家になられたのですか？

谷口 絵本は独学で、大学生の時に家で作っていたんです。製本まで全部自分でやっていたですね。最初は、原画を

そのまま本にしていました。卒業制作は日本画を描いたんですが、それとは別に家で絵本づくりを続けていて。それで、絵本作家としてデビューするにはどうしたらいいんだろうと考えていたときに、イラストレーションという雑誌で絵本コンテストの公募を見つけて応募したんです。そうしたら審査員特別賞をいただきまして。翌2004年にその作品が出版されました。それがデビュー作の『サルくんとお月さま』です。

編 大学を卒業した翌々年にはもうデビュー作が出版されたんですね。

谷口 でも、全然売れなくて、すぐ絶版になりました。『サルくんとお月さま』には、あえて文字を入れなかったんです。文字がなくても絵を追っていけばストーリーが浮かんできて、ちゃんと伝わるんじゃないかと思って。でも当時、この本は小さい箱に入っていて、文字もなく、しかも黒い紙を活かした暗いタッチだったせいか、日本では全然売れませんでしたね。

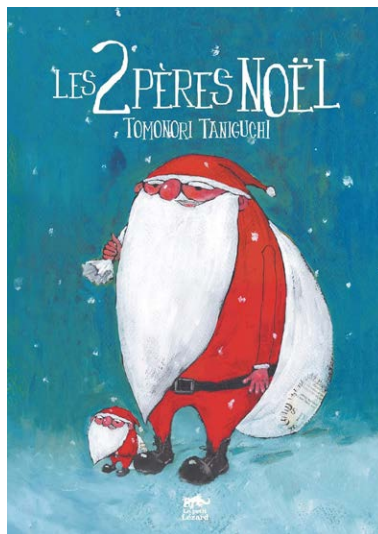
編 それで海外に進出されるようになったんですね。

谷口 バイトをしながらコツコツと絵本をつくり、海外に売り込みに行ったりしていたんです。そんな中、この文字のない絵本を日本で見たといいフランスの出版社から連絡があって、わざわざ日本まで会いに来てくれたんです。そこで、作り溜めていた作品をお見せしたら、全部出しましょうと言ってくれまして。そこから年に1冊か2冊ぐらいのペースで、フランスを中心にイタリアなどでも出版されるようになりました。日本の出版社にも、その間、同じ作品



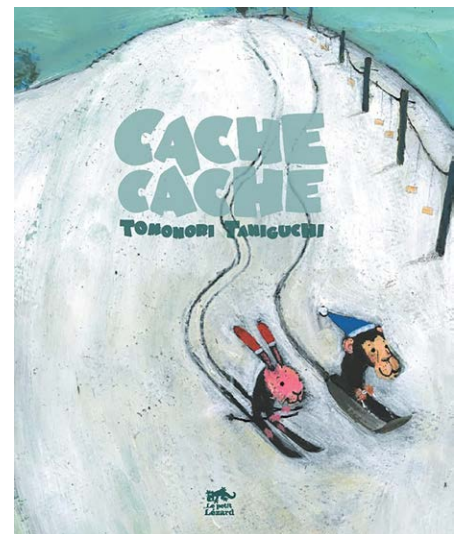
『サルくんとお月さま』

谷口さんの絵本作家デビュー作。文字がなく、絵だけで読み進める構成が特徴。読み手の感じ方によって、物語に広がりが生まれる。



『LES 2 PERES NOEL』

2009年にフランスで出版された作品。後に『おおきいサンタとちいさいサンタ』のタイトルで日本語版も出版されている。



『CACHE CACHE』

2007年にフランスで出版された作品。タイトルは「かくれんぼ」の意味。日本語とフランス語が併記され、国を越えて楽しめる構成となっている。

を売り込んだりしていたんですけど、なかなか出版には至りませんでしたね。

定説を覆した 『100にんのサンタクロース』

編 2013年に再び日本で出版されるようになったのは、どのような経緯からなのでしょうか？

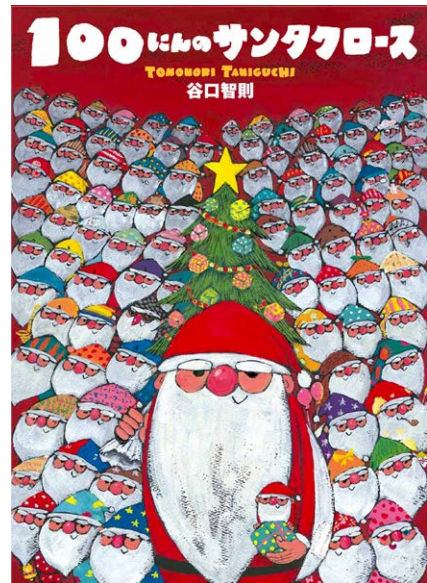
谷口 当時は日本でアルバイトをして、お金が貯まったらフランスやイタリアに行っていたんです。向こうでは絵本が出版されているので、行くタイミングで出版社さんがサイン会のツアーを組んでくれて。向こうには可愛い絵本屋さんがいっぱいあるので、いろいろな都市を回ってサイン会をしていました。そんな海外での活動の様子を日本のメディアが取り上げてくれるようになって、それを見た日本の出版社から「日本で本を出しませんか？」というオファーがあったんです。そのとき、すでに次回作として描いている作品があったので、「これはどうでしょう」とお見せしたのが『100にんのサンタクロース』でした。そうしたら、サンタの絵本はやめたほうがいいと言われてまして。

編 どうしてですか？

谷口 サンタの絵本は 11月に店頭に並んで12月にはもうなくなるので、もっと長く本屋さんに置いてもらえる内容の方がいいですよ。でも、もう出来上がっていたので、これでいきたいと話して無理やり出してもらったんです。

編 いまでは代表作の一つとなっているこの作品に、そんな裏話があったんですね。

谷口 初版5,000部と、新人にしては多めの部数をつくってもらったのですが、それが11月中に全部売り切れてしまいました。それで増刷をかけたんですけど、もうクリスマスには間に合わない。あちこちの本屋さんから注文が来るのに、入荷されなくて。「デビューしたばかりの新人作家なのに、どこでも売り切れるなんて」というインパクトで、一



『100にんのサンタクロース』

個性豊かな100人のサンタが力を合わせ、子どもたちにプレゼントを届けるまでの物語を描いた一冊。

気に名前が知られたみたいです。1月の増刷分も売れて、3刷目が春になったんですがまた売れて。それから、いろいろな出版社さんから依頼がくるようになりました。

編 シーズンを過ぎたら売れないという定説をひっくり返したわけですね。

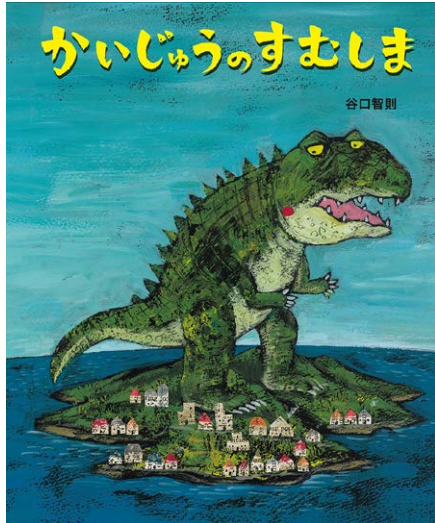
みんなが得意なことを活かして 幸せになれる世界を描きたい

編 谷口さんの作品には、いろいろなキャラクターが出てきますが、どのようにストーリーを発想されるのですか？

谷口 原点は動物の擬人化なんですけど、その擬人化した主人公の得意なことが誰かのためになって、自分も幸せになって、みんなを幸せにできるというようなイメージで全部描いています。サルくんだったら木に登れる。サンタさんだったらみんなにプレゼントを届けられる。それぞれが得意なことを活かして、みんなが幸せになれるといいなという発想でストーリーを考えています。ゾウさんだったら大きいとか、鼻が長いというのを使ってお話をつくっていったり、カメレオンだったら色が変わるところを活かしたり。僕の中では、登場するキャラクターたちはみんな同じ世界に住んでいて、その物語によって主人公が変わっているという感覚です。

編 若い頃に描かれた作品と、いま、お子さまがいらっしゃる環境で描かれているものと、変化はありますか？

谷口 ありますね。子どもが小さいときは子どもの言ったことをメモして、これをストーリーにしようとかいうことが



『かいじゅうのすむしま』

自然災害や戦争が続く世界情勢を背景に、未来の地球に思いを馳せ、平和への願いを込めて描いたという作品。

いっぱいありました。たとえば『くいしんぼうのクジラ』などがそうですね。娘が2歳の頃、僕が「ごちそうさま」って言ったらすごく泣くんですよ。「いただきます」と言ったらニコニコして。まだ食べたいのに、勝手に「ごちそうさま」にしないでみたいな感情なんでしょうね。言いたいんだけど言えなくて泣くんです。それで「いただきますが大好きで、ごちそうさまが大嫌い」というフレーズをメモっていて、これをストーリーにしようと思ってできたのが『くいしんぼうのクジラ』なんです。そのとき、お兄ちゃんが6歳だったんですけど、魚の図鑑ばかり見ていて、動物じゃなくて魚の本も描いた方がいいよって言うんです。そうか、じゃあ魚も登場させてみようかなと思って、いっぱい食べる魚って何かな…というところからクジラにたどり着いて、ストーリーをつくっていったんです。

編 社会の変化や時代背景によっても、描く内容が変わることはあるのでしょうか？

谷口 そうですね。コロナ禍になって怪獣をよく描くようになりました。最初、怪獣は悪者として描いてたんですけど、その怪獣が小さなお花を持っていたりとか、途中から変わっていったんです。実は怪獣はいいものなんじゃないかなと思ったところから『かいじゅうのすむしま』という作品が出来上がりました。やはりコロナの影響とか、世界情勢、戦争なども、ストーリーを考える上で影響しますね。『カメレオンのかきごおりや』を描いたのはちょうどコロナが始まった頃、み

んなが学校も休みになってどこにも行けなかった時期でした。これは世界中を旅して色を集めてくるカメレオンの話なんですけど、こんなときだから、絵本でいろいろなところに旅ができるといいなという思いでつくったものです。

紙の温もりに、サインの手書きの温もりが合わさって、特別な一冊になる

編 絵本の原稿が完成して、出版物として読者の手元に届くまでにいろいろとチェックされると思うのですが、どんなところに気を使いますか？

谷口 僕の場合は黒い紙に描いているので、色が沈むことが多くて、色校は何回もとりますね。いつも絵を描いている紙はマーメイド紙からラシャ紙で、作品によっても変わりますが、なるべくマットな紙を選んでいきます。とくにラシャに描く作品は、出版するときもラシャっぽい質感の紙を選ぶようにしています。黒さも紙によって違って、ラシャ紙はちょっとグレーに近い感じですね。マーメイド紙はもう少し濃い黒です。印刷ではあまり真っ黒にならないようにしています。黒のバランスや紙による発色の違いなど、紙と色のバランスはいつも意識していますね。

編 黒い紙に描かれるという独特な作風ゆえに、気を使う部分も多そうですね。

谷口 でも逆に、青は綺麗に出ますよ。僕の場合、絵の具は6色しか使わないんです。プリンターって、CMYKの4色が基本で、特色を入れても6色ぐらいじゃないですか。それがあれば僕の絵もできるんです。ブルーもシアン系のブルーだし、ピンクもマゼンタ系のローズピンク、それにイエロー。この色とこの色を混ぜるとこんな色になるな…と、頭の中で勝手に掛け合わせができるんです(笑)。だから、僕の作品は印刷でも色が出しやすいとよく言われます。



編 CMYKの「K」は紙の黒ということですね。

谷口 そうです。だから、その代わりに白を使っています。奥行きを出すときは白をちょっと混ぜて濃淡をつけたり、紙の黒地を残して濃くしたり。全部を綺麗に塗りすぎないようにして奥行き感を出しています。あとは微妙な水の使い方もあります。水をちょっと多めにして、あえて透かしたり、水をこってり使うとざらっとした黒い残り方になったりするので、いろいろと使い分けていますね。

編 このデジタルの時代において、印刷物としての絵本の魅力はどんなところにあると思いますか？

谷口 ページをめくるとストーリーがある『本』というものが僕は好きで、紙に印刷するという温もりも含めて絵本だと思っているんです。自分がこういうカフェをやったり、全国のいろいろなところに行ってサインをしているのもそういう思いがあるからで、子どもたちの前でサインしてあげたら、紙の温もりにサインの手書きの温もりが合わさって、その絵本は子どもたちにとって特別な一冊になると思うんです。絵本自体は次の世代になってもずっと読めるものですし、すごく大事にしてもらえるものではないかと思っています。

できるだけ多くの人たちに直接会って自分の絵本を届けたい

編 こちらのギャラリーカフェ『zoologique(ズーロジック)』をオープンされたのはいつ頃ですか？

谷口 2012年ですね。以前カフェと本屋でアルバイトしていたので、いつかはこういうお店をやりたいと思っていました。その頃はまだ日本で出版された自分の絵本が

なかったの、海外で出た絵本が買える場所として、全部自分で仕入れて売ってしていました。つくったものをちゃんと届けるところまでが自分の仕事だと思っていて、その“届けるための場所”としてこのお店を始めたんです。いまはいろいろなところにイベントなどで呼ばれて行くようになったので、全部にサインはできないですけど、それでもなるべく頑張っ、多くの人たちに直接届けたいと思っています。

編 お忙しい中、全国でライブペインティングなどのイベントも開催されていますよね。

谷口 海外の絵本の見本市に呼んでいただいて一時期は毎年行なっていました。そこでは、子どもの頃に読んだ絵本の作家さんや、大人になって展覧会で見た、イギリスの有名な作家さんたちが僕の横で一緒にサイン会をしているんです。しかも、皆さん、色のペンでしっかり書くんですよ。日本だと絵本作家さんに会う機会は少ないですよ。だから日本でも“直接会える場”をつくりたいと思ったんです。やはりその絵本を描いている作家さんに会うと、一冊への思い入れが全然違ってきますよね。あるとき、商業施設からクリスマスイベント向けの依頼をいただいたことがあり、ライブペインティングみたいなことをやってみようかなと思って始めたのがスタートですね。

編 それがいまや全国で引っ張りだこだそうですね。

谷口 週1以上、やっていますかね…土日連続でということもありますし、もしかしたら100回近くやっているかもしれません。ライブペインティングでは、その場でリクエストされたキャラクターをどんどん即興で描いていくんです。子どもたちに何を描いてほしい？ と聞いて。するといまま



ギャラリーカフェ『zoologique』

zoologiqueとはフランス語で「動物園」の意味。店内にはさまざまな動物キャラクターが描かれ、絵本の世界を“体験”することができる。谷口さんご自身もお店に立つことがあるという。

で描いたことのない動物を描いてと言われることがあって、「これ、次の主人公に使えるかも」と思いながら描くときもありますね(笑)。

100にんのサンタと出会う街に サンタの家のような美術館と図書館を

編 谷口さんの代表作でもある『100にんのサンタクロース』はオブジェになっていて、四條畷市の街のあちこちに置かれているんですね。この『100にんのサンタクロースプロジェクト』はどのようにして始まったのですか？

谷口 100にんのサンタクロースは、もともと絵本ではなくて、商業施設のイベントが始まりなんです。海外で活動するようになってから、それがメディアで取り上げられると、広告とか、商業施設の装飾などの依頼をたくさんいただくようになったんです。それで、名古屋の商業施設からクリスマスイベントの仕事をいただいたときに、ストーリーを考えて、その世界観で装飾したんです。その一環で、サンタのオブジェを8体つくって館内に配置したところ、とても好評で、毎年クリスマスのイベントで使ってもらうようになりました。何年か続いたそのイベントが終了した後、サンタのオブジェを捨ててしまうのももったいないので、知り合いのお店に頼んで置いてもらったら、「あのサンタはどうやったらもらえるの?」とあちこちから言われて(笑)。置きたいというお店がどんどん増えていったんです。

編 すごくですね。そうして“8にんのサンタ”が“100にんのサンタ”になっていくんですね。

谷口 ちょうどその次の年ぐらいに、四條畷に新しい商業施設がオープンすることになって、オープニングイベント

で何かやりたいということになって、またサンタさんを10体つくったんです。そのようにして、装飾や広告などの仕事のたびにつくって、四條畷市内のいろいろな施設に置いていき、市も協力してくれるようになって、どんどん増えていきました。100体目は昨年のお阪・関西万博会場でのライブペインティングで完成させました。

編 今後、チャレンジしてみたいことや、描いているビジョンのようなものはありますか？

谷口 四條畷の街に美術館と図書館をつくらうと思っています。僕自身が子どもの頃から読書好きで、図書館で育ってきたようなものなので…。もう予定地もだいたい決まっていて、2年後ぐらいに完成する予定で進めています。

編 どんな図書館と美術館になる構想なんですか？

谷口 実は大阪・関西万博のときにシンガポール館を見て一目惚れして、屋根をリユースさせていただくことになったんです。シンガポール館って、赤くて丸いディスクが重なり合っていてできているんですけど、それを見たときに、サンタさんの家の屋根にしか見えなかったんです(笑)。それで、通訳の方と一緒に交渉に行ったんですけど、最初は皆さんすごい怖い顔をしていて。でも、サンタさんの絵本を持って行って、ストーリーを読んでもらったら一気に表情が変わって、「これならぜひ使ってください」と言ってくださったんです。やはり絵本だから伝わるんですね。ストーリーがあって、絵があって、言葉の壁を越えられるんだと実感しました。なので、サンタさんの家みたいな赤い屋根の美術館と図書館が完成する予定です。

編 それは楽しみですね。本日は貴重なお話をありがとうございました。



『100にんのサンタクロースプロジェクト』

四條畷市の街を歩いていると、絵本から飛び出してきたサンタに出会える。大阪・関西万博会場で完成した100体目の「みらいサンタ」はJR忍ヶ丘駅に設置されている。